

《中学生の部》

佳作（警察庁交通局長賞）

愛知県東栄町立東栄中学校

1年 伊藤 新太

お互いに気をつけないとね

僕の住む地域には日帰り温泉があります。この温泉は地元の人にも人気ですが、たくさんの観光客も訪れます。そして、そこの前の道路は通行量の多い道路で、僕の通学路です。

この温泉の道路に面している駐車場の出入口は、入口と出口に分けられています。このことは駐車場の案内、マナーやルールとして、地元民はわかっているのですが、観光客は看板や路面の表示に気づかず、出口と入口を間違えることがよくあります。

小学校五年生のときのことです。自転車に乗って先に行く友達を追いかけていた僕は、「プッ、プワー！」と突然大きなクラクションを鳴らされました。その車は温泉の入口から急に出てきたのです。僕は心臓がバクバクして体がふるえました。安全をよく確かめなかった自分もいけなかったけれど、僕は入口から出てくるなんてあり得ない、危ないじゃないかと思いました。

中学生になってからも、同じ場所で危険な目にあいました。部活動を終えて帰宅する途中のことでした。またもや入口から勢いよく出てきた車にはねられそうになったのです。疲れていて注意散漫になっていた僕自身も悪いけれど、入口から出てくるなんておかしいと腹立たしく思いました。

帰宅した僕は、このことを母に怒り気味の口調で話しました。母は穏やかに語りました。

「事故にならなくて、けがをしなくて、本当によかった。相手の人は観光客の人でしょう。温泉の出入口のマナーやルールもよく知らないだろうし、土地勘がなくて左右どちらに曲がろうか考えて集中力がなくなっていたかもね。道路を走っている車にだけ目が行って、通行人に気づかないこともあるのよ。お互いに気をつけないとね。」

僕は母の言葉を聞いてはっとしました。僕は出入口を間違えた運転手の責任にばかり意識が向いていました。母の「お互いに気をつけないとね。」という言葉が心にずっと入ってきました。僕自身も安全に十分気をつけなければと強く思いました。それからの僕は、周囲の安全をよく見極め、運転手がこちらを目視しているかということなども確認して、落ち着いて安全に横切るようになりました。

僕の場合は幸い大事には至りませんでしたが、一つ間違えれば交通事故になって大けがをしていたかもしれません。事故の多くは、お互いの安全確認や心のゆとりで防げると僕

は考えます。運転手は時間に余裕をもって安全運転に努め、土地勘のない地域では、より一層細心の注意を払うようにしてもらいたいと思います。そして、僕自身も慣れている道路であっても油断することなく、常に交通安全を心がけます。このようにして、交通事故の少ない安全な町、地元民だけでなく、観光客からも愛される町にしていきたいです。